



TITLE:

イギリス農民一揆の研究(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

富岡, 次郎

CITATION:

富岡, 次郎. イギリス農民一揆の研究. 京都大学, 1966, 文学博士

ISSUE DATE:

1966-11-24

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/212010>

RIGHT:

【 1 】

氏 名	富 岡 次 郎
	とみ おか じ ろう
学 位 の 種 類	文 学 博 士
学 位 記 番 号	論 文 博 第 20 号
学位授与の日付	昭 和 41 年 11 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	イギリス農民一揆の研究

(主 査)
論文調査委員 教授 前川貞次郎 教授 井上智勇 教授 織田武雄

論 文 内 容 の 要 旨

本論文はイギリスにおける封建制盛期（13世紀）から絶対王政末期・市民革命（17世紀）にいたるまでの、有名な農民一揆の展開を個別的に分析しつつ、それに対応して王権の中央集権化・絶対王政の形成とその解体が、いかに進展したかを解明しようとするものである。

第一章「1381年以前の農民闘争」。イギリスでは13世紀の後半、領主制支配の強化に対して、農民は法的身分を確定するための訴訟闘争、個々の領主に対する日常闘争、あるいは暴力的非合法闘争によって抵抗した。しかし、これらの抵抗はいずれも孤立的散発的で成功することは、ほとんどなかった。

第二章「1381年の大反乱」。しかし14世紀になると、黒死病による労働力の不足などから直営地の貸出しと賦役の金納化が進行した。このマナ経営の構造転換に対応して、大貴族が没落騎士層を封建家臣団に組織し、所領内への王権の介入をしりぞける傾向があらわれた。これに対し国王は騎士層を援護し、また「労働者規制法」（1349—51）実施のため治安判事制を導入して、中央集権化の強化をはかった。たまたま対仏百年戦争によって王室財政が悪化したので、臨時税や人頭税が賦課され、これを機会にワット・タイラーを指導者とし、ロンドンを中心に、イングランドの大半（東部・東南部）にわたる、イギリス史上最初の「1381年の大反乱」がおこった。この反乱は富農を中心に中小農と手工業者をまじえ、賦役制の撤廃・不当な租税賦課反対・悪官吏の排除・取引の自由などを要求し、領主・役人・都市商人を攻撃した。この反乱の結果、農奴制の強化は阻止され、15世紀には農民の地位は全体として向上した。

第三章「ジャック・ケイドの反乱」。百年戦争が有利に展開せず、国内では大貴族間の抗争にまきこまれたため、王室財政は破綻にひんし、その負担は農民の上にふりかかった。これを機に1450年に反乱がおこり、反乱軍は大貴族の悪政打破・重税賦課反対を要求し、大貴族とその支配下の地方官吏を攻撃した。

第四章「イギリス絶対主義と修道院解散」。30年間にわたるバラ戦争（1455—85）によって貴族の大半が没落したが、新しく支配者となったチューダー家のヘンリ7世・8世はジェントリ地主層を基盤として絶対王政の基礎をきずいた。とくにヘンリ8世は宗教改革によってイギリス国教会をつくり、さらに修

道院解散（1536—39）によって封建貴族である宗教諸侯の所領を没収し、その勢力を解体するとともに、絶対王政の経済的基礎を確立し、集権的な行政機構を整備した。

第五章「恩寵の巡礼」。この修道院解散を契機として北部全州に「恩寵の巡礼」とよばれるカトリック教徒の反乱がおこった。この反乱はふつう宗教反乱と規定されているが、基本的にはジェントリを指導者とする農民一揆であり、そこには多くの政治的・経済的要求がかかげられている。しかし、強制的に参加させられたジェントリは反乱の過程でたえず国王と妥協しようとしたため、反乱軍の内部に分裂が生じ、反乱は失敗に終わった。

第六章「西部の反乱」。第七章「ケットの反乱」。前者はエドワード6世のカルヴィン派的宗教改革政策に反対しておこったものであり、後者は牧羊エンクロジュアに反対しておこった農民一揆である。ここで注目されるのは、一揆にジェントリが参加しておらず、富農を中心とした中小の村落共同体農民が、絶対王政の支配に反抗しはじめたことである。

第八章「17世紀の農民一揆」。エリザベス1世の時代は農民一揆は比較的すくなかったが、17世紀スチュアート家の支配下になると、絶対王政の反動的性格が強化し、ジェントリ層が分裂し、その一部はふたたび富農・一般農民・手工業者と結んで絶対王政と対決するようになった。「西部諸州の反乱」(1629—31)はその一例であり、イギリス革命の前駆的現象といえる。

第九章「市民革命期の農民闘争」。市民革命期にも干拓反対闘争、エンクロジュア反対一揆、ディガーズ運動など孤立的散発的に農民反乱がおこっているが、共通にみられる特徴は、中小農による村落共同体諸権利の擁護であり、また共和政成立以後は、反地主的闘争としての性格が強いことである。

以上概観した農民一揆の個々について、著者は独自の分析方法によって考察している。すなわち、一揆の社会経済的背景だけでなく、「蜂起の発端」とその展開過程を精密にたどることによって、一揆をおこそうとした階層をうかびあがらせ、ついで「反乱軍と鎮定軍の構成」を検討することによって、一揆の指導者、反乱の起動力となった階層を明らかにするとともに、反乱を鎮定した権力の性格を解明する。さらに「反徒の要求」を調べて反乱の性格を究明し、「反徒の攻撃対象」を明らかにし、最後に「反乱の挫折あるいは終結」を検討して反乱後の権力の対応の仕方、反乱の歴史的意義を考察している。要するに著者は、この研究方法によってイギリス農民闘争の歴史を、「農民の抵抗と権力の対応」という視角から分析をこころみている。

なお最後に詳細なイギリス農民一揆年表が付加されている。

論文審査の結果の要旨

わが国においてはもちろん、イギリスにおいても、中世末期からの農民一揆について体系的研究はまだ公刊されていない。著者は14世紀から17世紀にいたるイギリスのいくつかの有名な農民一揆をとりあげ、独自の研究視角から分析をくわえ、農民運動がイギリス絶対王政の形成過程に果たした歴史的役割を明らかにした。今日わが国で利用しうるほとんどすべての史料や研究に依拠しつつ、個々の農民一揆の実態を詳細に実証し、綿密な分析をこころみ、その社会経済史的意義を究明した点は、きわめて高く評価される。

個々の農民一揆をすべて同一の研究視角から考察したため、それぞれの農民運動のもつ特殊性の解明に

はやや足りない点があり、また著者が企図した社会経済史研究と政治・憲政史研究との有機的連関には十分でない部分も認められるが、永年にわたる著者の着実な研究の成果はよく示されており、イギリス社会経済史や農民運動の今後の研究にとっては、不可欠なものであり、わが国の学界に寄与するところ大なるものがある。

よって本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。